配置薬に使用される生薬の特徴④

村上　守一

コウボク（厚朴）　*Magnolia obovata* Thunb.（モクレン科 *Magnoliaceae*）

『神農本草経』（漢代）の中品に収載され、「中風、傷寒の頭痛、寒熱、驚悸、気血痺、死肌を主どり‥」と記され、『名医別録』（梁代）には「中を温め、気を益し、痰を消し、気を下し、霍乱および腹痛、張満、胃中の冷が胸中を逆して嘔して止まぬもの‥」と述べられる漢方の要薬です。

中国には四川省や浙江省で生産される香りが強く、辛く、紫色を呈する唐厚朴（*M. officinalis* var. *biloba*）と変種の凹葉厚朴があります。李時珍（1590）は「その木は質朴(あらい)にして皮が厚く、味が辛烈で色が紫赤である。故に厚、朴、烈、赤の諸名がある。」と記しています。厚皮、重皮、赤朴、烈朴などの別名があるのはこれに由来していると言われています。日本産の和厚朴はホオノキの樹皮で、香りは弱いが前二者と共に局方に収載されています。

ホオノキは日本人にとってかかわりの深い植物です。材は「朴歯の下駄」と言われるように、下駄の歯に用いられたり、質が柔らかく、狂いが少ないため、版木や家具、膳、椀、将棋の駒等に使われています。広い葉は飯や餅を包んだり、味噌を載せてあぶる朴葉味噌は香りを楽しみながらご飯がすすみます。物を包(ほう)むことから「保々加之波乃岐(ほほかしはのき)」の和名が付いたとも言われています。『万葉集』に「吾がせこが捧けて持たるほほかしわあたかも似たる青ききぬがさ」(僧恵行)と、倒卵形の大きな葉が偽輪生状に広がった様が歌われています。

植物の特徴

北海道から九州まで分布する日本特産の落葉高木で高さ 20mにも達します。春にまず大きな葉を枝端に偽輪生状に広げ、5～6 月にはその先に径 15 ㎝程の大きな盃形の花を咲かせます。花弁は白色で 6～9 枚、倒卵形、雌蕊と雄蕊は多数で花糸は鮮紅色、集果は多数の袋果の集合で、中に赤色の種子を 2 個ずつ入っています。

唐厚朴は葉がやや長径であり、花弁数も 9～12 枚と多い。凹葉厚朴は名前のとおり葉の先端が矢筈(はず)状に窪んでいます。

ホオノキ

ホオノキ（果実）

生　薬

土用の頃に幹、枝の皮を剥ぎ日干ししします。厚くて潤いがあり、香りが強いものが良品。

厚朴

成　分

精油（α，β，γ-オイデスモール、クリプトメリジオール等)、フェノール類（マグノロール、ホオノキオール)、アルカロイド（リリオデニン、マグノクラリン、マグノフロリン等）を含有しています。

薬効および使用法

健胃消化、瀉下、鎮咳去痰薬とみなされる胃苓湯、半夏厚朴湯、平胃散等の漢方処方に配合されます。